



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3212 号 2016.8.26 発行

### 大作ちぎり絵全国入賞 遠軽・向陽園の三沢さん 審査員「見る者を圧倒」



北海道新聞 2016年8月24日  
東京の展示会場に飾られた三沢さんのちぎり絵「タイトル不明」(アーツ千代田3331提供)。作品は縦長だが、会場の都合で横に展示している

【遠軽】町内の障害者支援施設「向陽園」に入所している三沢隆さん(86)が、全国規模の美術公募展「ポコラート全国公募展」の作品部門で、応募作約1600点の中から上位6点に贈られる入賞に初めて選ばれた。入賞作は縦580センチ、横95センチの巨大なちぎり絵「タイトル不明」で、審査員から「見る者を圧

倒する存在感がある」と高い評価を受けた。

同展は東京都千代田区などが主催し、今年で6回目。作品部門は、障害の有無や年齢、経験などの応募条件はないが、障害のある人が多いのが特徴という。作品は絵画や写真、工作、彫刻など多彩で、今年は北海道から沖縄まで1632点の応募があった。このうち154点が入選し、その中からさらに選ばれた入賞6点が8日に発表された。

「タイトル不明」は、三沢さんが住宅用の壁紙の裏にさまざまな色の和紙を1センチ角ほどに切って貼り、赤やピンク、青色などの波のような模様を描いた。制作期間は約9カ月。「躍動感とスケールの大きさが感じられる」などとして千代田区長賞に選ばれた。

三沢さんのちぎり絵制作は当初、色紙やパネルに和紙を貼っていたが、数年前に三沢さんが「(和紙を貼る作業を)終わらせたくない」と話したことから、担当職員が長さ5メートル以上にもなる壁紙を用意するようになった。入賞について、三沢さんは「うれしい」と喜ぶ。三沢さんの作品を含む入賞・入選作は8月上旬まで東京で展示され、三沢さんも鑑賞に行ったという。

向陽園では利用者が日中、絵画やコラージュなどさまざまな創作活動に携わっている。利用者が同展で入賞するのは4年連続で、毎年異なる人が選ばれている。担当職員は「(入賞した利用者は)作品を生み出す苦労もなく、みんなすらすら創作している。そのうえ入賞もしており、不思議に思っている」と話している。(佐藤圭史)

### 足こぎ車椅子「コギー」 VR活用リハビリも 河北新報 2016年8月24日

足こぎ車椅子を開発、販売するベンチャー企業のTESS(仙台市)が、製品名を「COGY(コギー)」に改め、販売強化に乗り出した。VR(バーチャルリアリティー)技術を車椅子と組み合わせて使うリハビリシステムも開発し、福祉施設への導入拡大を目指す。

製品の特徴が伝わりやすいよう、従来の「Prohand(プロファンド)」から変更した。コギーは車椅子に座ったまま、前方のペダルを足で踏んで前に進む。半身不随の人

でも片足が動けば自力で乗ることができ、リハビリにもつながる。

VRを使ったリハビリシステムは、室内に固定した車椅子のペダルを踏むと、プロジェクターで壁などに映した仮想空間の画像が動く仕組み。

**世界中の好きな場所を見ながら車椅子でリハビリができる**

インターネット上の「グーグル・ストリートビュー」などを活用し、世界中の好きな場所を移動体験しながらリハビリできる。同社は福祉施設などを対象に、車椅子やプロジェクターなどをセットでリースする。

車椅子と連動したスマートフォンのアプリも開発した。ペダルにセンサーを埋め込み、踏み込んだ際の足裏の圧力や重心の位置などを測定。リハビリ計画作りや進み具合の確認などに生かせる。

車椅子の販売数は現在、年間約1200台。当面は国内で販売されている車椅子の約1%に当たる2000台を目標にする。製品名の変更に合わせて、ネット販売の専用サイトを開設。7月中旬には初の体験試乗会を仙台市内で開いた。

鈴木堅之社長は「まだまだ認知度が低い。多くの人に効果を実感してもらうため、試乗会を各地で開いていく」と話した。



## ビルの屋上で野菜を収穫 若者が集うミニ農園（青森）



福祉新聞 2016年08月24日 編集部  
**野菜を収穫する若者**

ここは青森県八戸市十三日町にあるビル（3階建て）の屋上。丸太で囲まれたミニチュア農園「13ファーム」（縦約2・5m、横約3・5m）で15種類の野菜が育つ。若者らが集うホットな空間だ。

若者の就労・自立を支援するNPO法人「ワーカーズコープ」（本部＝東京）、地元の十三日町商店街振興組合が協力し2014年4月、町名にちなんだ名を付けて開園した。

ビルには社会福祉法人「ユートピアの会」が運営する障害者のグループホームなどが入っている。屋上の有効活用を、と同会や



防水シートの上に敷く砂利、約2トンの土やプランターを若者らがエレベーターのない屋上まで運んだ。農家の指導で施肥し、雪のない春から秋にかけ、枝豆、ミニトマト、キュウリ、ニラ、ナス、カブなどを栽培。若者らが水をやり、収穫して食育セミナーで使ったり、家で食べたりするという。

**13ファームは八戸市の中心部、ビルの谷間にある**

世話役を務めるワーカーズコープの俵山悟さん（28）＝八戸・階上地域福祉事業所長＝は、「地方都市でも土に触れる機会は減っている。就労を目指す若者や障害者が外へ出て土をいじり、社会とのコミュニケーションを取れるようになれば」と話している。

## 相続人に罰金1億円求刑…遺産寄付“偽装”で脱税の不動産管理業者に 大阪地検

産経新聞 2016年8月24日

遺産を社会福祉法人に寄付したように装い、相続税約4億9千万円を脱税したとして、相続税法違反などの罪に問われた相続人の不動産管理業、高木孝治被告（74）ら4人の論告求刑公判が24日、大阪地裁（国分進裁判官）であった。検察側は高木被告に懲役3年6月、罰金1億円を求刑した。

検察側は論告で、高木被告が遊興で兄の遺産を使い果たし、納税を免れようとした経緯を説明し「納税制度を根幹から揺るがし、不公平感を助長する犯行だ」と指摘。共犯の男3人には関与の度合いに応じ懲役3年～1年6月、罰金2千万円～500万円を求刑した。

起訴状によると、4人は平成26年9月、偽造した遺言書で約8億5千万円を和歌山県の社会福祉法人に寄付したように装い、相続税を脱税したとしている。

事件では、4人と共謀したとして同法人の理事で和歌山県議の花田健吉被告（58）も逮捕、起訴されている。



### 夏休み明けの自殺防げ 読売新聞 2016年08月25日 悩み相談のために開発されたアプリ「SORENA」の画面

#### ◆フリースクール開放／アプリや電話で相談を

夏休み明けに急増する傾向が報告されている子供や若者の自殺を食い止めるための動きが県内で相次いでいる。子供の不登校に取り組む県内の4団体がフリースクールを開放し、スタッフが相談を受け付けるキャンペーンを9月1日まで実施するほか、別のNPO法人はスマートフォンを通じて気軽に相談できるアプリを開発した。

内閣府の2015年版自殺対策白書によると、13年までの42年間に自殺した18歳以下の1万8048人について、死亡日を日ごとに集計した調査では、夏休み明けの9月1日が131人と最多で、突出して多かった。白書は「長期休業の休み明けの直後は、生活環境等が大きくかわる契機になりやすく、大きなプレッシャーや精神的動揺が生じやすい」と指摘。子供の変化を把握するための見守りの強化や、相談などの対応を集中的に行うことが効果的だと説明している。

4団体はNPO法人などで、福島市の「ビーンズふくしま」と会津若松市の「寺子屋方丈舎」、伊達市の「みんなの広場」、二本松市の「青い空」。ビーンズふくしまの若月ちよ理事は「子供が自殺を踏みとどまれるよう、相談できる機会を増やしたい」と話している。問い合わせはビーンズふくしま（024・529・5184）へ。

4団体は、臨床心理士や教員OB、精神保健福祉士らが毎日24時間相談に応じる「24時間子供SOSダイヤル」（0120・0・78310）の利用も呼びかけている。

会津大の学生らがメンバーの会津若松市のNPO法人「福島インターネットテレビジョン」が開発したのは、悩みをインターネットを通じて投稿し、県立医大の学生らが務める相談員が返信するためのアプリ「SORENA」。若者に身近なスマートフォンだけでなくパソコンでも利用可能で、ニックネームや性別などを入力・選択して登録すれば匿名で利用できる。相談員がまだ少ないため、当面は毎週末に返信するという。

看護師の資格を持つ小川美農里副理事長は「電話よりも相談のハードルは低い。自殺を考える状況に追い詰められる前に気楽に相談してほしい」と話している。アドレスは（<https://www.sorena.help/login>）。

### 「怒り通り越す」被害者男性の家族 相模原事件 テレビ朝日 2016年8月25日

神奈川県相模原市の障害者施設で入所者ら46人が死傷した事件から26日で1カ月です。被害者の男性と家族がANNの取材に応じ、「怒りを通り越している」と話しました。

障害者施設「津久井やまゆり園」の入所者・尾野一矢さん（43）は、2階の部屋で寝てい



た時に腹や首などを刺されました。今は相模原市内の病院で治療を受けています。

父・剛志さん：「ここまで傷があって、まだこの下も穴が開いている」

母・チキ子さん：「遠くを見ているような。ジーッとして」

父・剛志さん：「怖がっているというか、自分がどうなっているか不安だと思う」

警察によりますと、逮捕された植松聖容疑者（26）は「障害者はいなくなればいいと思った」と供述しています。

父・剛志さん：「怒りは通り越していると思います。わーっと騒いだからどうなのって。それよりも自分の子どもを幸せにするかを考えないと、あいつ（植松容疑者）に負けたことになるから」

家族は施設に戻ることを望んでいますが、退院のめどは立っていません。

母・チキ子さん：「(Q.事件からまもなく1カ月だが?) なんか、だんだん苦しくなります」

### 惨劇の現場”内部映像 障害者施設の今は...

テレビ朝日 2016年8月25日

神奈川県相模原市の障害者施設で入所者ら46人が死傷した事件から26日で1カ月です。事件の現場となった施設の入所者は体育館での生活を続けるなど、今ももとの生活に戻れずにいます。

ANNが入手した現在のやまゆり園内部の映像です。廊下には多くの花束や入所者に向けた手紙が並べられています。この事件では入所者19人が死亡、職員も含めて27人が重軽傷を負いました。事件当日は157人が入所していましたが、今は94人に減っています。犠牲者が出た部屋ではまだ暮らすことができず、自分の部屋に入れられない人は体育館などで生活しています。多くの入所者や家族が施設でのもとの生活を望んでいて、県などはなるべく早く全面的に再開したいとしています。

### 県内関係者、模索続く 相模原殺傷事件、26日で1カ月 中日新聞 2016年8月25日

相模原市の知的障害者施設で十九人が殺害された事件の影響が県内にも広がっている。福祉施設では不審者の侵入対策を見直す動きが相次ぎ、障害者や家族は「障害者は社会に必要とされていないのでは」と不安を訴える。二十六日で事件から一カ月。施設の安全性を確保しつつ、障害者への理解をいかに深めていくべきか。福祉関係者らの模索が続いている。

「不審な人が入って来たらすぐに逃げ、周囲の人に伝えてください。いすや机など身の回りの物を使って体を守って」

警察官によるさすまたの使い方の実演に見入る施設利用者ら＝福井市の「C・ネットサービス」の工場で

福井市下河北町にある障害者が働く工場で、二十三日に開かれた防犯講習会。福井南署員が、さすまたを使って不審者の取り押さえ方を実演しながら、施設の利用者や職員三十人ほどに注意点を呼び掛けた。



この工場では、知的障害者ら十～六十代の約三十人が自宅や近くの寮から通い、衣類のクリーニングなどの業務に携わっている。事件を受け、工場側が講習会開催を署に依頼した。工場の運営会社社長、松永正昭さん（74）は「万が一の場合に備え、利用者や職員に自分の身の守り方を考えてほしかった」と話した。

県は事件後、県内にある二十七の入所型の障害者施設に職員を派遣し、安全対策の現状の調査や再発防止策の検討を始めた。六十代から百歳以上のお年寄り百人ほどが利用する介護老人保健施設「九頭竜長生苑」（福井市寺前町）では、避難マニュアルの作成や夜間に

職員同士で使う緊急連絡網の見直しを考えているという。

十代から九十代までの知的障害者約二百四十人が入所する施設「若越（じゃくえつ）ひかりの村」（福井市島寺町）では、強化ガラスや防犯カメラを設置してきた。防犯対策の拡充について、総括次長の小田輝人（てるひと）さん（53）は「塀で囲ったり、施設に閉じ込めたりして、防犯のために障害者を隔離するようなことはしたくない」と悩ましさを吐露。ある施設関係者は「防犯対策の予算を増やすと、職員の賃金や利用者の負担増につながりかねない」と難しさを打ち明ける。

事件によって施設の防犯態勢の見直しだけでなく、障害者や家族、施設職員の不安感をいかに解消していくかも大きな課題となっている。

知的障害者の保護者らでつくるNPO法人「県手をつなぐ育成会」（福井市光陽二）には、知的障害者の保護者を通じて「自分たちも必要ないのだろうか」と不安がる電話や手紙が寄せられているという。

四月には、障害を理由とした差別の解消を目指す障害者差別解消法が施行されたが、今回の事件は差別意識の一端を浮き彫りにした。同会の常務理事、日向明世さん（66）は「健常者の命も、障害者の命も、同じように平等であるはず。本当の意味での共生社会を目指すためには、もっと社会全体の障害者に対する理解が進まなければいけない」と訴える。（玉田能成、小川祥）

#### 防犯へ意識高める 障害者施設で不審者対応訓練 日本海新聞 2016年8月25日

鳥取県倉吉市大宮の障害者支援施設ヴェルヴェチア（松下昇施設長）で24日、不審者対応訓練が行われた。同施設の職員約30人が、倉吉署の指導の下、訓練を通して防犯、危機管理意識を高めた。



相模原市の障害者施設殺傷事件を受け、同署が管内の福祉施設に呼びかけて開いた。防犯講習では、不審者を刺激せず落ち着かせる▽適切な距離を取る▽複数の職員で対応する一など、不審者への基本的な対応や刺股の使い方を学んだ。

刺股の使い方を学ぶ参加者ら＝24日、倉吉市大宮のヴェルヴェチア

その後の対応訓練は、不審者に扮（ふん）した警察官がナイフを持って施設に侵入したという想定で実施。参加者は不審者に質問する、刺股で取り押さえる、警察に通報するなど、おのおの役割を果たしながら訓練に励んだ。

松下施設長は「職員間の連携が大事だと思った。非常通報装置などの防犯設備を整えていきたい」と話した。

同署は29日にも、県立厚生病院（同市東昭和町）で行われる防犯訓練で指導する。（池田悠平）

#### <相模原殺傷>容疑者「サイレン聞き逃走断念」 河北新報 2016年8月25日

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺され27人が負傷した事件で、元施設職員植松聖容疑者（26）＝東棟の女性9人に対する殺人容疑で再逮捕＝が「施設を出てから逃げようとしたが、立ち寄ったコンビニでサイレンの音を聞き、逃げられないと思った」と供述していることが24日、捜査関係者への取材で分かった。

2月に衆院議長公邸へ持参した襲撃予告の手紙には「入所者を抹殺した後は自首します」と記していた。神奈川県警津久井署捜査本部は、実際には出頭直前まで逃走を考えていたとみている。事件から26日で1カ月。捜査本部は今後、殺人未遂容疑も立件する方針。

## ふつうの子ども

中國新聞 2016年8月25日

子どもの読書感想文の課題図書に、大人にも読まれている本がある。世界で300万部のベストセラーとなった「ワンダー」。主人公の男の子、オーガストは10歳。顔に重い障害があり「きみがどう想像したって、きっとそれよりひどい」と語る▲彼が初めて学校に通う1年を、物語は描く。じろじろ見られ、避けられ、変なあだ名も付けられるが、少しずつ友情の輪が広がっていく。もちろん彼の顔は変わらない。変わったのは、周りの子どもたちの受け止めだ▲同じ風景でも、その人の価値観によって見え方は変わる。相模原市の障害者施設で19人が殺害された事件から、あすで1カ月になる。容疑者が「障害者なんていなくなればいい」となぜ考えたのか、いまだ闇の中にある▲その暴論に、全国の障害者や家族から抗議の声がやまない。危機感さえ伝わってくる。私たちの社会が効率や生産性を追うあまり、強者優先の風潮がはびこっているとすれば、恐ろしい▲物語の終わりに、オーガストはつぶやく。「ぼくにとって、ぼくはただのぼく。ふつうの子ども」。誰かを普通じゃないと決めつけていないか。課題を突き付けられているのは大人も含めた社会の側だ。

## 大阪・中之島にiPS細胞の研究拠点 府市と阪大が合意、検討会設置へ

産経新聞 2016年8月24日



### 再生医療などの新研究拠点

阪大（大阪府吹田市）と大阪府、大阪府は24日、同市北区中之島4丁目の市有地（約1・2ヘクタール）に、人工多能性幹細胞（iPS細胞）を活用する再生医療の研究や芸術の魅力を発信する新たな拠点の開設を目指す方針で合意した。財界や研究機関を交えた検討会を設け、国とも協議しながら具体策を詰める。

阪大の西尾章治郎総長がこの日市役所を訪れ、吉村洋文市長と松井一郎知事に基本構想案を手渡した。

阪大の前身、大阪帝国大の創設地である中之島を、学術・医学・文化・芸術の知的資源やビジネス人材などが世界から集まる拠点とする内容。実現時期について、西尾総長は「大学創立90年を迎える平成33年をめどにしたい」と語った。

構想案によると、医学では再生医療の一般化を目指す。京都大iPS細胞研究所など関西の研究機関や企業と連携し、臨床研究から治験、産業化、海外展開までを担う拠点の開設を想定する。最先端医療の実用化に向け、国家戦略特区を活用して医療機器の早期承認や人材育成に取り組む。訪日外国人に高度な医療と観光を提供する「医療ツーリズム」の展開も目指す。

隣接地では、市が新美術館を33年度までに開館する予定で、美術・芸術の研究拠点も置く計画だ。

府市は医療分野での新産業創出に力を入れ、健康と長寿をテーマに掲げて37（2025）年の国際博覧会（万博）誘致を目指している。一方で、中之島を文化集客拠点とする「中之島アイランドミュージアム構想」も進めており、阪大側と考え方が一致した。

市有地について、市は従来の売却方針を改め、貸し出す方向。吉村市長は「阪大の力を借りて新しい価値を創出し、大阪の魅力を高めていきたい」と語った。



**【顔】海外へ派遣、全盲のJICA職員 照屋さん** 読売新聞 2016年08月25日  
**照屋 江美さん(45)**

思い立ったら、白杖を頼りにまずは行ってみる。昨年は友人と2人で富士山頂まで登った。「やってみないと、自分に何ができて何ができないのか、分からないので」。人並み外れた行動力に白羽の矢が立った。

国際協力機構(JICA、本部・東京)が支援要請を受けたモンゴルに、障害者の社会参加を促すため、3人チームの一員として2年間派遣される。JICAの62年の歴史でも、視覚障害者の海外長期派遣は初めてとなる。

撮影・高橋美帆

沖縄県浦添市出身。生まれつき弱視で、網膜の病気が進み5年前から全盲になった。1996年からJICAに勤務。当事者の視点や経験を生かし、途上国の関係者を研修で招いて、日本における障害者支援のノウハウを伝えてきた。

モンゴルは障害者の働く場が少ない。現地では、調査や人材育成を通し当事者の声を施策に結びつける役割を担う。「環境を整えれば、私たち障害者は、もっとできる。それを伝えたい」

海外の一人暮らしも初めて。「長くいればいるほど一人で行動できる範囲が広がる。言葉も覚えたいし、とにかく楽しみ」と笑顔で語った。(社会保障部 高倉正樹)



**「目標は金メダル」 リオパラ出場5選手ら活躍誓う** 埼玉

産経新聞 2016年8月25日

日本時間9月8日に開幕するリオパラリンピックに出場する県ゆかりの選手らが24日、県庁に上田清司知事を表敬訪問し、大会での活躍を誓った。

訪れたのは日本代表選手5人と日本選手団の役員4人。上田知事は「皆さんのプレーから障害者だけでなく困難な状況の人たちが勇気を与えてもらっている。しっかり頑張ってください」と激励し、選手5人に記念品を手渡した。選手団の中森邦男副団長(62)は「選手には最高の状態で競技に参加して最高の成績を残してほしい。スタッフはそのための環境を整えたい」と話した。

車椅子同士での激しいぶつかり合いが特徴のウィルチェアーラグビーに出場する岸光太郎(44)は「2回目の出場なので、どういう試合にしようか楽しみにしている。チームの目標は金メダルです」と抱負を語った。

**社説：パラリンピック ロシア除外 意味大きい** 北海道新聞 2016年8月25日

国ぐるみとされるドーピング問題で、9月のリオデジャネイロ・パラリンピックに、ロシア選手が国の代表として出場する道が閉ざされることが確定した。

国際パラリンピック委員会(IPC)が決めた排除決定へのロシア側の不服申し立てについて、スポーツ仲裁裁判所が訴えを退ける裁定を下した。

リオ五輪では、国際オリンピック委員会(IOC)が主体的な判断を見送り、結果的にロシア選手は270人以上が出場した。

これに対して、IPCは厳格な判断を貫いた。

薬物と無関係な選手もいるとみられ、同情の余地はあるが、ドーピングの背景になっているメダル数を競い合う勝利至上主義への警鐘と受け止めたい。

IPCの判断は妥当と言える。

世界反ドーピング機関(WADA)によると、ロシアでは2011年以降、障害者を含む多くのトップアスリートが薬物を恒常的に使い、巧みな隠蔽(いんぺい)工作が行われ

ていたことが明らかになっている。

I P Cが厳罰を下し、仲裁裁判所がそれを追認したのは、常態化した「国ぐるみ」の不正に対する危機感からにはほかならない。

障害を越えて、自らの限界に挑む。その高い志がパラリンピックが目指すべき精神だろう。

指摘された大がかりな不正は、それと相いれない。

競技団体に判断を丸投げしたI O Cも、足元を見直し、教訓としなければならない。

気になるのは、オリンピックと同じような仕組みになっている薬物検査のあり方だ。

パラリンピックに出場する選手のおよそ7割が治療のために薬を使っていると言われる。治療薬には、禁止薬物の成分が入っている可能性も否定できず、一律的な検査に問題はないか。

選手の個々の体調や治療状況などを踏まえた上での検査もあっていい。I P CやWAD Aには、そんな柔軟な方法も検討してもらいたい。

選手にも、注意と自覚を促したい。

障害者スポーツはハンディを乗り越えるため治療と訓練からスタートし、競技へと発展してきた。

たとえ不自由さはあっても、障害をものともしない頑張りや、同じ境遇の人を励まし、健常者には勇気や感動を与える。それがパラリンピックの魅力である。

そこには、ドーピングなどは不要だ。

## やっぱりこの8月は暑すぎた！ 大阪で猛暑日過去最多の21日！！



産経新聞 2016年8月25日

近畿地方は24日、朝から厳しい残暑に見舞われ、大阪市も最高気温35.5度を記録する猛暑日となった。大阪管区気象台によると、8月中の猛暑日はこれで21日目となり、記録が残る明治16(1883)年以降で過去最多となった。

同気象台によると、平成に入ってから、8月に35度を超える猛暑日がこれまで最多だったのは12、22年の計20日。次いで6、25年に観測した計18日だった。今年8月が観測史上最多となったのは台風の直撃やまとまった低気圧の通過などがなかったからとみられる。

24日の近畿地方は各地で35度を超え、堺市で36.9度、神戸市でも35.8度を観測した。午後には天気は下り坂となり、各地で大雨洪水警報が発令。雨の影響で30度台前半まで気温が下がるところもあった。

同気象台によると、25日も近畿地方は高気圧に覆われて晴れるものの、上空に流れ込む寒気の影響で、午後には大気の状態が不安定となり、雨に見舞われる場所もあるという。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行